2026_0513「アセビの若い果実」日々の理科 4294 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

春の白い鈴のような花が終わったあと、職場の構内の植え込みでは、アセビ（馬酔木　Pieris japonica）が静かに次の季節へ歩みを進めていました。枝先に房状につり下がっていた花序の一つ一つは、受粉を終えると子房がふくらみ、いまは赤みを帯びた若い果実へと姿を変えています。

写真に見える小さな球形の実は、まだ成熟途中の蒴果で、初夏から夏にかけてしだいに肥大し、やがて褐色へと変化していきます。先端に細く残る花柱の名残は、ついこの前まで可憐な花であったことを物語り、花の季節を知る者には、生命の連続した時間を感じさせます。アセビの果実は秋に熟すと五つに裂け、内部にできた多数の微細な種子を風に託して周囲へ広げます。そのため、目立つ果肉で鳥を誘うタイプではなく、風散布という戦略を選んだ植物です。

葉や茎、花、果実に至るまでグラヤノトキシン類という有毒成分を含み、馬が食べれば酔ったようになることから「馬酔木」の名があります。シカさえ避けるこの毒性は、都市の植え込みでも強い防御力として働き、美しいだけではないしたたかな生存戦略を秘めています。

春には白花、初夏には若い赤い果実、そして秋には種子散布へ。何気ない構内の植栽も、こうして季節を追って観察すると、一つの低木の中に精巧な生活史が見えてきます。日々通り過ぎる場所であっても、足を止めて見上げれば、植物は確かに次の世代への準備を進めているのです。

（2026 年 5 月中旬／文京区お茶の水女子大学構内）